

食堂で

フアンショ：さて皆様、プレゼント（薬）をお持ちしましたよ。皆さんいつもの席とは違って座っていますね。私、混乱していますよ。ドローレス、貴女とモデスト。

ドローレス：有難う。

フアンショ：エミリオ、長い手だから取って。貴方の飲み薬です。

エミリオ：背が高いのも役に立ちますね。

フアンショ：待って、エミリオ、待って。

貴女、ドローレスも待って、私は混乱している、私に返してモデストの薬を。

エミリオ、貴方とモデストの薬を逆に渡してしまいました。アスピリンの量以外は。

ですが二人は同じ薬、問題はありませんがね。

診療室で

医者：そう、その通りです。基本的に貴方はモデストと同じ薬を飲んでいます。

エミリオ：しかし。それは有り得ません。私に対して間違っただけではないですか。

モデストはアルツハイマーですよ。

医者：えへん、ところでエミリオ、アルツハイマーに特別の治療法はありません。

これらの薬は歳を取った方々にしばしば処方する一般的な薬と私達は話しております。

エミリオ：そうですか、そうですか。なんと馬鹿げた！私はそのことに思いつかなかった。

ですから昨夜は、アルツハイマーのことを考えて、目が閉じられませんでした。

納得が行きました。

医者：それはそうですね。これらの事は私に任せて、

心配をしないで、私はここで診断していますからね。

エミリオ：ええ、色々想像していました。これからは問題が無いとわかり、気持ちになりました。

医者：うふむ。

外で

エミリオ：二階の若い女性は誰だ？知っているだろう。麻痺した患者だ。

ミゲル：二階に上がったのか、ロックフェレ。

エミリオ：あの若者は誰なのか。なぜこの老人ホームにいるのか？

ミゲル：空家の不法居住者だった。

若い女性：バカ野郎 嫌なヤツ。

ミゲル：住んでいた建物が倒壊し下敷きになった、そして半身不随になった。

引き取る者がなく、家族も無いようでここに運ばれてきたようだ。

エミリオ：まるで物のように横たわっていた。彼等は屋根裏部屋のガラクタのようだ。

ミゲル：だから上には行かないように言っただろう。

エミリオ：ミゲル、私はアルツハイマーだ。

ミゲル：言われたのか？